
竜と双子の物語

ASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と双子の物語

【Nコード】

N3514J

【作者名】

ASH

【あらすじ】

これは、ある国での物語。竜と少女とその兄の日常のなかの小さな物語。竜は出会う、主となる少女に。少女は出会う、自分の使い魔となる竜と。これは竜と少女の日常と非日常を書いた物語。

人物紹介（前書き）

人物紹介です

キャラ増えましたので、少しずつですが人物を紹介したいと思います
ネタバレ注意！！

人物紹介

ミナレイ・マクウエント（ミナ） 性別女 1人称 私

誕生日 10月10日 14歳 O型 身長158

容姿：眼 赤みの強い紫 タレ眼気味で大きい

髪 黒に近い赤 腰までの長さ 軽くウェーブ

笑顔が可愛い人好きがする美少女

性格：無邪気 天然でたまにいろいろすごい発言をする

仲間は大切にしているが敵には容赦ない

戦いは結構好きで楽しくやるタイプ

家族：父レオン（マクエント公爵、王弟） 母ミリオナ（公爵夫人、元公爵令嬢） 兄レク（双子）

趣味：動物と戯れる 散策

特技：いたずら 他人を魅了する笑顔（無自覚）

好きな物：動物 精霊 家族 クウ アリイ 親切な人

嫌いな物：自分を嫌いなもの 虫

身体能力：運動全般上の中 反射神経が異常に良い 膨大な魔力

武器：小刃5 短剣2

魔法：火と雷と風の3タイプが特に得意
そのほかの魔法も人並み以上に使える

所属：魔法科

地位：公爵令嬢（王太子の婚約者）

レクライ・マクウエント（レイ） 性別男 1人称僕

誕生日10月10日 14歳 O型 身長162

容姿：眼 青みの強い紫

髪 黒に近い青 ゆるいウェーブ 襟足長め
美少年

性格：やさしい

他人には社交場の笑みしか浮かべない
妹至上主義（過保護気味）

趣味：読書 いたずら 策略

特技：いたずら 社交辞令 黒いこと

好きな物：妹 家族 幼馴染 動物

嫌いな物：うざい人 妹をねらう奴 実力を慢心する人

身体能力：運動上の上 反射神経良い

武器：剣 小刃2

魔法：水、風が得意 光も使えるが魔力消費が激しく余りつかわない

所属：魔法科

地位：公爵家嫡子

アリクト・ホルウェール ？？？歳 1人称 我 性別 男

人間時20前半 身長185

変化時 座高30

容姿：眼 金

髪 白銀 腰以上のストレート（人間時）

美青年

性格：やさしい 博識 人見知り

主至上主義

普段は温厚だが主の敵には非道になる

好きな物：主 レク 睡眠 小動物

魔法：光、雷、風が得意

その他闇以外すべて使える

地位：ミナの使い魔

光の竜皇

人物紹介（後書き）

これから増える予定です。

今回書かせていただいたのは序章で出た人達です

序章「少女と竜（前）」

【キリエート】

ここはマクウェント公爵が治めている領地　そして、グリフォールド王国２番目の都市と言われ王都のような賑わいをみせている。

「レクだけ行くの？私も行きたい、ねえいいでしょお母様」

「うーん、連れて行ってあげたいけどね。あなたは今日お勉強があるでしょ？」

「そうだよミナ、明日には帰ってくるんだから今日は留守番だよ、おみやげかってくるからね」

そうしてレクとお父様、お母様は出かけて行った

レク達は今日王宮で行われるお披露目に出るために、王都へ行った。

レクと私は双子で同い年だけど、今日お披露目に行けるのは男児であるレクだけ。

男は１０歳、女は１３歳でお披露目なの。

今日のお勉強は午後から、今はまだ早朝まだまだ時間はある。

家に居てもする事はないし、1人だけ連れて行ってもえなかった事もあって、悲しくなってきたので憂さ晴らしのために1人で町に向かった。

町に1人で行くのは、初めていつもはレクとか侍女とか誰かと一緒だった、だから少し寂しかったけど、馴染んだ場所だからいろいろな人が声をかけてくれる、この人たちは、私が領主マクウエントの娘だって事を知ってるから気にかけてくれる。

私はいつもレクと二人で行く秘密の場所に向かっていた。そこは海岸にある崖に開いた洞窟で足元は半分は岩場で半分は水が通っている。

レクと居る時はいつも、洞窟の入り口近くで遊んでいたけど今日は奥には入ることを止める者は居ない。ずっと前から奥がどうなっているのか気になっていた私は、好機とばかりに奥へ入って行った。

洞窟は奥に入るにしたがってだんだん暗くなっていた。

私はふと、何かに呼ばれているように感じた寂しように、何を求めているかのように・・・

足を奥へ、奥へと進めるたびにだんだんとそれは鮮明になっていた。

洞窟の一番奥は祭壇の様なものがあつた

- それ - は祭壇に設けられた大きな扉の向こうから感じられた。私は何かに導かれる様に扉に手を触れた。

「つつ - !」その時、急に手の指先が切れた。血が流れて足元に落ちた。

すると祭壇が淡い水色の光に包まれた

そしてあの、大きな扉がゆっくりと、しかし確実に開いていった

-
-
-

序章「少女と竜（前）（後書き）」

処女作です

拙く遅拙ですが楽しんでいただければ幸いです

序章「少女と竜（後）」

――時間が止まったような感覚だった。体はふわふわと軽くなつたように感じた――

扉は完全に開いた

扉の奥は、あたたかな光が満ちていた。そこから巨大な竜が現れた。竜は陽の光のような白銀の体とやさしげな金色の眼をしていた。

竜は私のほうを見ると大きな体を低くして「キューン」と甘えた声で鳴いた。

私はその時、竜を怖いとは思わなかった

竜を見て最初に思ったのは可愛이었다

竜は、上目ずかいにこちらを見ていた

私は好奇心を抑えきれなくなつて、ゆっくりとしかし、着実に竜に近ずいて行つた。そして、そつ

と竜の頬、目の下あたりに手を触れた。

すると竜は、はじめはびっくりしていが、こちらに頬を寄せてきた。

竜はつるつるしていたけど暖かい不思議な手触りだった。

『はじめまして』

それは突然だった。頭の中に声が響いてきた

「うわぁ！なんなの！？」

『あ、驚かせてしまいましたか、すみません』

「あっいえ こちらこそおどろいてごめんね」

『フッフ面白い方ですね』

竜はそう言って目を細めた。たぶん笑っているのだろう

「べつに、面白くないと思うのだけど」

『すみません』

「え、別に謝って貰うことじゃないよ」

竜は今思い出したように目を丸くして

『あっ自己紹介がまだでしたね、

我は竜皇が一つ光の司竜ホルウェールです』

竜が自己紹介をしたので、礼に則り私も自己紹介をした。

「マクウエント公爵家長女ミナレイ・マクウエント、10歳です。
よろしく願います。ホルウェールさん？」

そう呼ぶと竜は、きょとんとした顔をした

『あつすいません、ホルウェールというのは光の司竜という意味を表しています、名前ではないんですよ』

「えっじゃあ、名前ないの？」

『はい、竜族の間では私がホルウェールということがわかっていればよかったので』

「そうなの、それは不便ね・・・あつ！
それじゃあ私が名前をつけてあげる」

『本当ですか。ありがとうございます』

そう言つてうれしそうに眼を細めて尻尾を動かした。

その様がすごく可愛かったので

私は持てる知識をフルに使つてこの可愛い竜にぴったりの名前を考えた

「決めたわ、あなたの名前は・アリクト・私の国の古い言葉でね、希の明かりつて意味なの。あなたの体は太陽の光の様に綺麗な白銀で眼は朝の太陽のように輝いて見えるでしょ？」

『・アリクト・希の明かり』

竜は呟くようにささやいた

「気に入った？」

『はい！ありがとうございます、主』

「そう、それはよかった・・・」

・・・ん？ 私は耳を疑った、今アリクトは、主・・・と言ってなかったか？

「・・・アリクト・・・なんで主なの？」

私は恐る恐るきいた。そうしたらアリクトはうれしそうに話し始めた。

『はいっ、竜は皆、始めは名前を持っていないのです。だから名前をつけてくれた方は一生一度お仕えする主として、敬い服従するものなのです。』

そして名前と言うのはこの世に存在を示すものとなり、竜として最も重要な魔力が増えることを意味します。そして魔力の増量数は主と定めた者の魔力の純度、量に比例します。なので一般的に竜と主従を結ぶ者は魔力のある魔法使いじゃないでしょ？ あっすいません。今は関係ないことしゃべってしまいましたね』

アリクトはしゅんっとなった。まあそれもすごく可愛かった

「うんうん、大丈夫だよ聞けてよかったよ

でアリクト・・・ちょっと長いね名前愛称つけようか。うん・・・アリイ・・・アリイ

でいいよね？それでアリイどれだけ魔力増えたの？」

『それがですね。普通ではありえない量増えています・・・』

アリイは、私を足の先から頭の天辺まで見て今度は胸の辺りを見て

眼を丸くした。

そして私の胸元を鼻で示した

『あつ・・・ありました・・・竜玉です。』

主、竜玉がどういふものなのか知っていますか？』

「えっうんうん、特には。体から長い時間遠ざけると不安になると言うか・・・そんなのになるしか・・・」

『そうですか。竜玉というのはですね、本来竜の体の一部に埋まっているもので魔力制御のための物なのです。』

竜は大体、他の生き物より何倍もの魔力を持っていますで、制御が大変なんですよ』

「へっ、じゃあ、どうして私は竜玉を持ってるの？

これはね、生まれたときに私とレクがそれぞれにもっていたものの体の体には埋まってなかったよ」

『うん、なんででしょうね・・・人間と竜との違いでしょうか・・・？

主の竜玉は大きいですね、我とあまり変わりませんね』

そう言つてアリイは額を寄せてきた

「わあほんとだっでも色はちがうのね、私のは赤紫だけどアリイのは金だよ』

『それは大体、眼の色と同じなんですよ

そもそも眼や髪の色と言うのは魔力の属性などが現れますからね。

主のように、眼も髪も黒に近いなんて竜玉が現れなくとも、多大な

魔力量と属性の者だと判りますしね』

「へー、私って魔力多いんだ〜
じゃあ、私も魔法使いになれるかな〜？」

私は期待に満ちた目でアリイを見た。

アリイは尻尾を動かしながら眼を細め、はしゃいだ声を上げた

『ええ！主なら世界一の魔法使いになれますよ！我も使い魔として
お仕え出来ますし、

アシストすれば連携技なんかも出来ますしね。ああ今から楽しみで
す主……』

アリイは陶醉したような眼で私をずーと見た

「うん、私、魔法使いになるよ

それでアリイが誇れるような立派な使い手になるよ

一緒にがんばろうね、アリイ」

『はい。主、我が命尽きるまであなたのお心のままに……』

これが私とアリイとの出会いだった

序章「少女と竜（後）（後書き）」

1話も2話もなんだかんだでエピソードぽつかたかな？と思います

王城―兄と幼馴染（前書き）

兄さん視点です

王城―兄と幼馴染

【お披露目】

王城で行われたそれは誰もが憧れるもの・・・らしい。
「らしい」と言うのは僕にとってそれは不愉快以外の何でもなかったから

ここには、化粧臭いババアと僕の地位と将来性しか興味のない汚い貴族の野郎供、無駄にプライドばかり高い馬鹿な貴族の娘達。そんな奴らしかこの大広間にいない。

王の前でお披露目を行った僕は今、大広間に居る。

大広間は今年から社交界入りする貴族の子息や令嬢のために披露会が開かれている

そして僕の周りには貴族の令嬢たちがたかって、もとい集まってくる

正直、うざい「近寄ってくるな、害虫」って感じでも、そんなこと口にしないし、態度でも表さない。

だって僕は公爵家嫡子。迂闊なこと言つて無駄に敵を増やしたくない。いちいち相手するの面倒だし。だから僕は本心を隠している、信用してない人間には常にポーカーフフェイス

僕が自然体で居られるのは、極限られたわずかな者の前でのみ

双子のミナや乳母兄弟のロンとその兄のオンそれから幼馴染で親友のクウあとは両親と邸の古参の人達

その時、人垣が割れて1人の少年が歩いてきた。

その少年は海のような濃く綺麗な青の瞳と軽くウェーブのかかった肩までの蜂蜜色の髪を持っていた。

そして、少年は僕の目の前で止まった

「レイ、久しぶりだな」

「お久しぶりです。王太子殿下」

僕は笑顔が引きつっていくを感じた。いや、僕ばかりではなかった、この場に居た者全員の顔が歪んでいた。ある者は口を開けて目を見開く、所謂「ポカーン」という顔、ある者はこの世の者とも思えない様な驚愕を通り越した見るに耐えないような悲惨な顔（まあ基が悪いから）ある者は頬を染めるを通り越し真っ赤になって鼻血を流している（女性9：1変態野郎）失神している者もいる（失禁者有）

まあ、それくらい衝撃的な出来事だったわけ、何がって言うとな「嘲笑の王子」「犯し難き無表情」とまで言われ公の場では今まで決して笑うことのなかったイリーシャ・ランクル・グリフォールド王太子その方が笑っていたのですよ、それも、満面の笑みで、普段の無表情で分かるとおりクウはものすごい美少年、まだ幼い事もあつてか見様によつては美少女でも通るだろう。

あつ言つとくけどミナはこの無表情腹黒王子よりも何倍も可愛く綺麗だ。

僕達3人（レイ、ミナ、クウ）が並んでいる姿は「楽園」「天使の宴」「禁欲地」「絶対的な破壊力」などよく分からないが、なぜか寒気を覚える呼び名で呼ばれている。ちなみに僕達3人が揃っている所を見ると幸せになれるというジンクスまであるらしい（ロン、オン談）

なんて現実逃避ぎみに思考の海にはまっていたら

「何やってるんだ。アホ面が余計アホに見えるぞ」

「アホではないですよ。それで・・・なぜ今日はそんなに笑顔なんですか？」

そしたらクウはさらに笑みを深め周りを見渡してすこし眉を顰めた

「ここは人が多いな庭園に行こう」

そう言つてクウは歩き始めた

僕はクウの行動が分からずに両親と王夫妻を見た。

両親はいつも通り慈愛に満ちた目・・・を少し面白そうな目にして
いた。王は呆れた様な愉快な物を見た様な、王妃はワクワクと言う
のがぴったりの目で熱心にこちらを見ていた。
一体何なのだろう・・・？不安になってきた

「何してるんだ？いくぞ」

「ちょっとクウ言っておくけど今日ミナはいないよ」

「知ってる、今から話すことはミナにかかわる事だ。聞きたくない
なら聞かなくていいぞ」

あつ・・・何となく分かった、今からクウが何を話そうとしてい
るのか・・・

今は初夏まだまだ夜は寒い、そよ風が吹いただけでも肌寒さを感じる

僕達は薔薇園へと歩いていった。

薔薇園は迷路のような造りになっていて、中央にある噴水には限られた人間しかたどり着くことが出来ない

薔薇の甘い香りを感じながら歩いていると噴水の前でクウが足を止めた。

急に止まったから僕はクウにぶつかってしまった。

身長的にクウより劣っている（低いわけじゃない、少し平均より小柄なだけ、決して低いわけじゃない）

僕は尻餅をついてしまった。

「はあ、何やってるんだ、ほら」

クウは僕に手を差し出した。僕は断る理由もないので掴ませてもらった

「ありがとうクウ・・・それで、手、はなしてくれるかな？」

・・・反応がない、いぶかしんでクウを見ると、なぜか僕を凝視していた、「おゝい」と手を振ってみたらはつとした様になって、少し赤くなった

「ばっ・・・ちがうからな！別にそっくりだなとか思ってミナのこと思い出してたわけじゃないんだからな！お前とミナは全然似てなんていないんだからな！」

クウはあわてすぎてぼけつを掘った

面白いからからかってみようか・・・

「あれ？ほんとう、僕達、結構似てるって言われるんだけどなあ・・・ああそうか見分けがつくほど僕の事見てくれていたのかな？」

「ちがう！俺はお前じゃなくてミナを・・・」

「あははは、ここまで見事に引つかかるとはね、クウはミナの事となると単純だね」

「うるさい！・・・そんな事より、俺は一応、レイには言っておかなくてはと思って・・・」

僕は微笑みを浮かべた
ずつと前から考えていた。

いずれミナは誰かの所に嫁ぐ事になる。僕はミナとずつと一緒にいたいけどこれは仕方のない。だったらその誰かは、僕の信頼できる誰かがいい。ミナを裏切らず、一生ミナを愛してくれる誰か。

僕は条件に当てはまる候補を何人か選んである、父様にもその候補の中からでないとミナと家出すると伝えてあるし父様は絶対その中から選ぶだろう、そしてその中で僕が一番いいと思ったのは今、目の前にいるクウこいつは僕達の幼馴染だし、こいつの所に嫁いでも僕は毎日のようにミナに会える。そしてなによりクウはミナを愛してくれる・・・。

「レイ、実は俺、前から父上と叔父様に言っていた事があったんだ・・・。

俺はずつと前からミナが好きだった、だから・・・」

「うん、いいよ」

「・・・え？」

「だからいいよ、ミナとの結婚でしょ？僕は反対しないよ
あつ言っておくけど結婚はミナが17歳になつてからだよ。それま
では手、出しちゃだめだよ？君に譲つてあげるんだからそれくらい
守つてよね？」

クウは初めポカンとしていたけど途中からだんだん涙目になつて
最後は僕に抱きついてきた。

いつも年長として、しっかりしているから滅多にクウが泣くことは
ない。それ程うれしかったのだろう。まあ、当たり前だけどね、ミ
ナをあげるんだもん、平然としてたら殺意すら沸くよね

薔薇園の出口で両親と王夫妻が待つていた。皆それぞれにうれし
そうだ

「その様子では、認めてもらえたようじゃな。これでミナもワシの
娘か」

「何言つてるんですか兄様、ミナは私の娘です！」

「なにを言つてるんですかはあなたです。いつまでくだらない独占
欲持つてるつもりですか。これでクルト様が私達の息子になったの

ですよ。私たちの楽園ですよ。天使が3人なんですよ。ああ・・・」

「ええ、いいなミオちゃん・・・。レク君、私達の息子にならない？」

「遠慮しておきますよ伯母様。
父様そろそろ出ませんと帰れません。ミナが待つてるんですよ？」

ふう、今日は疲れた・・・精神的に。ミナに癒してもらおう

「ただいまあゝミナあ　今帰ったよ」

ミナの部屋に入ると見知らぬ美青年がミナと談笑していた

王城―兄と幼馴染（後書き）

ミオはミナ、レクの母

王妃とミナ母は幼馴染、仲がよく王城に遊びに行ったり、邸に遊びに来たりしている。

だからミナ、レク、クウの3人はよく遊んでいたけれど、クウの立太式をした頃から忙しくなり、王妃がクウを連れて来ることは少なくなっただ

邸「少女と竜と兄」

「ただいま、今帰ったよ」

その声とともに、この部屋に入ってきた人物がいた。

レクライ・マクウエント。愛称レク、私の双子の兄だった。

「あつ、おかえり、レク、あのね・・・」

レクは、私達の方を見て啞然とした顔をした。そして私の方に歩いてきて、ぎゅっと私を抱きしめた。そして、顔を耳元に近づけて震えた声でささやいた。

「ミナ、ただいま・・・で、あの人は誰・・・？」

レクの視線は、私の前に座っているアリイ（人化済）に向いていた。

レクは鋭く、アリイを見据え。アリイは微笑みながらも敵意を持った目でレクを見つめた。

「ん？え」とね・・・私の、使い魔・・・なんだ・・・」

二人の間に流れる不穏な気配を鈍いながらも感じ取った、私はつい、どもってしまった。

「使い魔？何で、ミナが使い魔を使役できるの？そもそも、人間で

しょ、この人。騙されてるんじゃないの？」

レクの言葉は、疑問を挟んでいるが言葉の端はしに強い感情がある。

「え〜とね、この子はちゃんと私の使い魔だよ？ちなみに、この子は人間じゃないよ」

レクはまだ、警戒を解かない。

そうだよ〜、だってアリの人化、完璧だもんね〜、私も実際に変身してる時見たから信じられるけど……。ありえないよね〜、だってこの白銀の髪に金の目だよ〜、すごく美人さんなんだよ〜、竜の時も綺麗だったけど、あの時は人外だったもんね〜、どれほどの美しさかわかんなかったんだよ、実際

「じゃあ、何だって言うんだよ。目とか髪とか見たことない色だけど……。」

「そろそろ、話してもよろしいでしょうか、主」

アリイが控えめに聞いてきた。

私が返事をする前に、レクが口を開いた。

「あるじ……。？ミナが主人なのか？」

アリイは一行に話そうとしない。ただひたすらに、私の方を見ていた。

「おいつ、聞いているのか？」

「あつ、そうか、アリイ、話してもいいよ」

「はい、それでは失礼します。」

レク様、初めてお目にかかります。ミナ様の使い魔、アリクト・ホルウェールでございます。以後よろしく……。」

「あ、……そうか。で、人間じゃないなら何の種族なんだ？ 獣人と違うみたいだし、妖精でもないようだけど……。」

アリイが自己紹介すると、危険はないと判断したか警戒を解いた。

「うーん、と怒られると思うから言いたくないんだけど……。」

「大丈夫だよ、怒らないから言ってごらん？」

「ほんとに怒らない？」

「怒らないよ……。僕が今まで嘘ついたことある？」

「昔、……結婚しようね？ って」

「……それは、まだ結婚するって意味を、一生一緒にいる……て言う事だと思っていて……。」

「主。話が逸れました。」

レクがなぜだか、涙目になってきたところで、アリイが助け舟を出した。

このあとで、二人が友情を結んだのは、また別の話……。

「そうだったね。え〜と、それで・・・何だったわけ？・・・
ああ、思い出した。アリイと何処であつたか？と何の種族なのか？
だったよね？」

ほら、レク、いつもの場所あるでしょ？」

「いつものつて、あの洞窟？」

・・・ミナ、もしかして一人で行ったの？

危ないから、一人で行ったらだめだって言っただろ・・・？」

「レク、怒らないって言っただよ・・・？」

「これは、怒ってるんじゃないよ。注意だよ。
それで。そこがどうかしたの？」

「だから。誰もいなかたから、奥まで入って・・・」

「我の居た世界とこちらの世界に繋がる扉を開いた・・・
そして、我と契約し、魔法使いになることにした。」

「・・・扉？そんなもの、あそこにはなかったはず・・・」

「扉というのは、力と資格を持った者が扉の絶対領域と言う範囲に
入って初めて、その姿を現します。」

「・・・力と資格？それは何なんだ？」

「力とは絶対的な魔力。資格とはその者が持っている魔力属性」召喚。
その中でも特に稀なランク、異界召喚。

つまり、主は魔法使いになるべくして生まれてきたような、そんな
方なのです。

・・・それと。レク様、あなたも、竜玉をお持ちのようですね？あなたからも主ほどではないにしろ、一般の魔法使いの何倍もの魔力を感じます。属性は・・・とてもやさしく、暖かな・・・その様な魔力は確か・・・いやし・・・。だったように思います。ご兄弟揃って素晴らしい物をお持ちのようだ・・・。」

そう言つて、微笑んだ。それは、さっきの様な冷たいものではなく、あつたかくて懐かしいような微笑だった。

「そうなのか？よく分からないけど・・・。」

レクは胸に手を当て、首をひねった。

「私は解るようになったよ。契約した時に。すごく気分がいいの・・・。」

そう、すごく気分がいい。体も軽くなつたみたいだ。

洞窟からの帰り道、いつもだったら軽い疲労感があるんだけど、今日はなかった。

「契約を行ったことで、主自身が魔力を認識しました。そのおかげで体が魔力を使つて、負担を軽くしているのでしょう。」

普通の魔法使いですと、それを行うには、魔力すべてを常時体に廻さなくてはいけない量です。

なので普通の魔法使いでは、余程奇特な思考の持ち主しかなさないことです。」

「へー、そうなんだ・・・。」

「で？アリエさんは、いったい何なんだ？」

「我は竜族。二つある頂点のひとつ、光を司る竜。人間的に言えば、竜神や竜王ですね」

「・・・竜って、ここ数百年、姿を現していない・・・もう滅んだ、と言われている・・・?」

「その様に云われているらしいですね。しかし、竜は滅んではいけません。竜はもともと、こちらの世界の生き物ではありません。

何かの弾みによって、この世界に飛ばされた者。または暇をもてあまし、こちらの世界に自ら来た者。と、さまざまな理由でこちらに居たようですね。」

「・・・でも、竜は巨大な姿と言われている。だけど今のあなたはまるで人間のようだ。」

「アリイは今ね、変化してるんだよ。大きいままじゃ、お家には入れなかったから。

本当はすごく大きくて、綺麗なんだよ」

「恐れ入ります、主」

「へえ、一度見てみたいな」

「あ、じゃあ、アリイと一緒に暮らすことが出来るように、お父様やお母様を説得するの手伝ってくれたら見せてあげるよ。どう?」

「え、そこまでの程、見たくはないな」

「・・・アリイすごく綺麗なんだよ。この世の者とも思えないくら

い・・・」

「実際、この世の者ではないようだけど・・・」

「私はアリイよりも綺麗な者見たことないよ・・・」

「うん・・・」

「アリイの本当の姿を知っているのは、私しかないんだよ？それでレクがアリイの本当の姿見たら、二人しか知らない秘密になるんだよ？」

私は賭けに出た。普段、レクは私の意見を可能な限り聞いてくれる、だけど偶にかたくなに聞いてくれない時がある。そういう時はだいたい、危険だとかレク自身どう仕様のないことなんだけど。でも、「誰も知らない」とか「他の人には秘密だよ」とか言うとき、自分の持てるすべてを使い、叶えようとしてくれる。なぜだか知らないけど（それはレクが極度のシスコンだから、この技はもちろん幼馴染ズにも利く。耐性のない人間はぶっ倒れる。自分が超がつくほどの美少女だと自覚のないミナは毎回不思議に思っている）

「わかったよ」（即答）

「やったあ！ありがとうレク！
これからも一緒だね、アリイ」

「ありがとうございます。レク様」

「でも、人間の姿はだめだ。他には化けれないのか？」

「どう？できる？アリイ」

「はい、出来ますよ」

そう言つと、白銀髪的美青年は、モフモフ四足動物。イタチのような猫のような、丸顔にひげと大きな眼、モフモフなのにスラッとした体に長く綺麗な尻尾、その先に金色の竜玉。といった完璧なまでに、私の趣味と真ん中のフォルムになった。

可愛すぎたので、ぎゅぐと抱きついた

「何これ、可愛すぎる。決めた、アリイ私が良いと言つた時意外はずぐとこの姿だよ？いい？」

「はい、わかりました。主」

「うん、これならいいかな。じゃあ、僕はお父様お願いしてくるよ」

「うん、ありがとう、レク」

「でもなんて言えばいいんだろう・・・？使い魔？ペット？どちらにしろなんて説明すればいいんだろう・・・」

「あつそのことなら大丈夫。私が魔法使いになることを言えば説明は要らないでしょ？」

「そついうものかい？」

「大丈夫、大丈夫。」

「ねえレクはならないの？魔法使いに」

「うん、そのこと考えてたんだけどね。僕もなろうかなって、ミナ一人じゃ心配だし。双子で魔法使いって言つのも面白いしね?」

そうして、私達の夢は魔法使いになった。

魔法使いになるということを両親に説明すると、心配そうにするけれど、笑って許してくれた

それから、私達の魔術との生活が始まった

邸「少女と竜と兄（後書き）」

10歳編最後です。

次回は14歳です

学園に入る予定です

脱字報告、感想などまっています。

誤字

学園編突入（前書き）

学園編やっと入りました

ミナ、レク14歳

学園編突入

「ミナ様、レク様。起きてください。朝ですよ」

「んっ・・・」

「・・・まだっ」

「・・・先程、エルテーズ学園から書状が届きました」

それを聞いた、ミナとレクは飛び起きた。

「本当!？」

「そろそろだと思った」

私はうれしくて、侍女のシーナに跳びついた。

シーナは中級貴族出身、私達より10歳年上の24歳で私は歳の離れた姉のように思っている。

「本当です。今、旦那様が持っていたらしゃいますよ・・・ところでここはミナ様のお部屋ですよね?レク様がどうしていらしゃるんですか?」

「うっ・・・」

そう、ここは私の部屋。薄い白黄色の壁に木の温かみのある床、落ち着いた綺麗な印象の部屋だ。

そして、今、私の隣で眠っていたレクの部屋は、この部屋の左隣に

ある白色の壁以外はココと一緒にの間取りの部屋だ

なぜか最近、レクと一緒に寝ると家の者達が叱るようになった。昔は寂しい、という理由から一緒に眠る事もあったが、今では許されないらしい……。なぜだろう……？

その事を家の者に聴くとあらあら、と言って微笑むばかりで教えてくれずに去って行ってしまう

家の者は誰も教えてくれないからレクに聴いたこともあるが、レクは、君は知らなくていい、といって教えてくれない。つまり、この謎は迷宮入りした

「昨日の夜はミナ様が寝るまで、私が就いておりました。つまり、レク様はミナ様が眠りについた後、この部屋に来たことになります。いくらご兄妹といえども、女性の部屋に夜分訪ねていかれるのはいかがかと思います。」

「うう、ごめんなさい……」

「私ではなくミナ様に謝って下さい」

「ミナ、ごめんね？」

「レク、私は気にしてないよ、昔みたいに一緒に寝られてよかったよ」

「ミナ……ありがとう」

「はあ、今日はもういいですよ。」

お二人共、着替えが済みましたらお部屋に来るようと旦那様が。」

「うん、わかった」

「わかった。ミナ後でな」

レクが出て行った後、私はシーナと他の侍女さん達に着替えさせてもらった。その後、部屋で朝ごはんを食べ終え、部屋を出た。部屋を出るとレクがちょうど部屋を出たところだった。私達は並んで歩き出した

「やっと、届いたな」

「うん」

「エルテーズ学園は世界一の難関校だから不安だったけど受かったみたいだな」

「そうだね。でも一応、私達は王国の双宝って言われる天才なんだよ、学園的にも私達が入った方が利益があるんだし、そんな心配しなくて平気だったね」

「・・・ミナはたまにすごいことを言うよね・・・」

「そう？でも事実だし」

「はあ、まあそれもそうなんだけどね」

そんなことを話してるうちにお父様の書斎についた

・・・コンコン

レクが書斎の扉をたたく

「入れ」

「失礼します」

私とレクは書斎に入った。書斎は壁一面に本棚があり、すべて本で埋まっていた

「ミナ、レク。お前達はエルテゼ学園に入学願書を出したようだな。どういう考えでなのか、きかせてくれるか？」

「はい。僕はたくさんいる学生の中で自分がどれだけ出来るのか。それを確かめたいと思いました」

「私はより深く勉学を学びたいと思いました」

「ほう、で、本当は？」

そう言ってお父様は尋ねてきた

「フフツ、お見通しですか」

「本当はですね。世界最高峰の魔法を学びたい。そう思ったからですよ」

レクがそう言つと、その答えで満足したのか。お父様は微笑みながら言った

「初めからそういっていい、小賢しいまねはいらんぞ。」

学園に行くからには最高の成績を残して来い。

お前達は自慢の子供達だ、（お前達の最高）を土産に帰って来い」

「はい。お父様」

「はい。がんばります」

「で、いつ出発するんだ？」

「そうですねー。準備は出来ていますし・・・」

「「いまから」」

「そうか、相変わらずせわしいな」

「誰に似たんでしょうね」

「お父様に似たんですね」

「ふふ、小賢しいな、我が倅達は」

「「お褒めに預かり光栄です」」

レクは手を胸に当てて、私はドレスの裾を摘まんで頭を下げた

「褒めておらん」

「それでは・・・」

「「いつてまいります」」

そう言っ て私達は部屋を出た

「きゅっくっくっ」

部屋に戻るとアリイが出迎えてくれた

アリイはさつき、部屋を出る時にはまだ寝ていた。起きたら私がいなくて焦ったらしい。

使い魔が主のそばから離れることは特別に命令がない限り滅多にない。

それは使い魔と主は血の盟約を行い特別な絆が生まれるから。らしい

「アリイ、学園に行くことになったよ。」

「そうですか、では我も邸の者達にあいさつしてこなくては・・・」

「ごめん、そんな時間ないよ。今から出るよ」

私はアリイをつかんで連れて行く。力を入れすぎて、アリイが変な声を出していたが気にしない

部屋を出るとレクが待っていた

「ミナ、準備はいいか？」

「いいよ」

「じゃ、いくか」

「うん」

そうして、馬車で3日。

森で囲まれた大きな湖、その中心に大きな島、その上に塔が何本も立っていた、その他にも大きなお城が何棟か。その規模は王城よりも大きいかもしれない

そうこれが、エルテーズ。王国立の有一魔法学科がある学校。

これから私達が学ぶ場所

学園編突入（後書き）

学園編突入といっても、まださわり程度 がんばります

ミナも社交界入りします。もうすぐに・・・たぶん

ちなみにまだミナとクウとの婚約はミナは知りません。社交界デビューしてないから知らないだけで、他の貴族さんたちは知っています

まだまだ未熟ですが感想などもらえるとありがたいです

学園「入学（前）（前書き）」

ミナ、レイ14歳です

学園「入学（前）」

【エルテーズ学園】

それは、グリフォールド王国直轄領エルテーズに建てられた（町丸々学園にした）、15専攻学科ある世界一大きな学園

周りを湖に囲まれ（その湖はエルテーズ全体の3割の面積）その中に学園の土地がある。一種の要塞で様である

学園には、全長200メートル幅50メートル程の塔（専攻学科別に15棟）と大小ある城（1年寮<2年寮<3年寮<4年寮<5年寮<講師、関係者寮<生徒会寮兼会議場）大講堂、大演習場と関係者以外立ち入り禁止の森がある。

学科は普通、理数、国際、農業、工業、商業、水産、家庭、音楽、美術、医術、軍兵、騎士、情報、魔法とあり、この中でもさらに分かれてくる

「エルテーズ学園、想像どうり大きいね」

「そうだね、町一つ分だからね」

「きゅ」

私達は今、学園と外とを繋ぐ有一の橋を渡っている。道順に行けば目の前に講師、関係者寮が見えてきた、講師寮は道に乗つかる様に建っていて通り道の所は高さ3メートル幅2メートルほど開いている。

中に進むと道の前の方から学園の制服を着た一人の男子生徒が歩いてきた、そして私達を見つけると微笑みながら近寄ってきた。その人はメガネをかけていて若草色の髪を顎あたりで切りそろえている、身長は175センチの細身でやさしそうな人だった。

「君たち、新入生？今、着いたの？」

「はい、レクライ・マクウエントです」

「ミナレイ・マクウエントです」

「「よろしくおながいします」」

「へー、双子ちゃん？かわいいねー」

「ありがとうございます」

「僕が可愛いかどうかは解りませんけど」

「アハハ、二人ともかわいいよ・・・ほんとうに、ね・・・。
あつなに？その子。ミナレイちゃんが抱っこしてる子」

アリの話の前に、この人の目が怪しく光ったのを私達は見逃していた

「この子は、私の使い魔なんですよ」

「へー。使い魔って事はミナレイちゃんは魔法科なのか」

「そうですよ、レクも魔法科なんですよ」

「すごいね、二人とも優秀なんだね」

「まあ、そうですけど。それより、あなたは誰なんです。自己紹介、僕達はしましたよ？」

「ごめんね、忘れてた。おれの名前はクラウドス・ノーライツ17歳、
騎士科専攻。父が子爵。名前はクラーと呼んで、よろしくね」

そう言っただけで先輩が私達の頭をなでてきた。
それが嫌だったのか、レクが不機嫌になった

「で、僕達に何か用ですか？」

「あっそうそう、もうすぐ入学式が始まるから講堂に・・・っても
始まる。荷物は運んである？運んでないなら手伝うから、それで

制服は・・・まだ着てないね」

「荷物は使用人さんに運んでもらったよ」

「制服は大丈夫だ。ミナ、よろしく」

「わかったよ」『空間・物体移転』

私がそう言うのと私とレクの周りの空間が歪み一瞬で消える。

私は黒に白線のブレザーに青と黒と白のチェックのズボン、それに肩半分にかかって足元まである黒のマント。それでレクはブレザーは私と一緒に青と黒と白のチェックのスカートでマントも一緒・・・っあ、まちがった・・・。

私は恐る恐る顔を上げた、普段ならレクは怒る・・・確実に・・・。

「え・・・？」

私は固まってしまった。それほどね？強烈だったんだよ、目の前の光景が・・・

レクは女子の制服を着ている、私のね？これは大丈夫（なにがだよ）そのレクに男子の制服を着た変態・・・もといクラー先輩が抱きついている・・・ね？おかしいでしょ？

私が呆気にとられている間に、さっきクラー先輩が来た方からまた人が来た。

その人は走っている。それも全速力で・・・そしてレクに抱きついているクラー先輩だけにラリアットをかけた。

クラー先輩は見事に吹っ飛んだ、2、3回バウンドしていた・・・

痛そう・・・

そして、クラー先輩を吹っ飛ばした人はレクに声をかけていた。

「おい、だいじょうぶか。傷は浅いぞ！」

「浅いつて言うか、ありません・・・。

助けてくれたようですね、ありがとうございます」

「ああ、というか悪かったな、あの馬鹿、野放しにして、あいつはかわいいものがあるとすぐに抱きつくんだ。まったく傍迷惑な・・・」

「

「そうですね。それより大丈夫ですか？あの人・・・」

もう名前を呼ぶのも嫌らしい・・・。

「ああ、大丈夫だ。すぐに復活する」

「・・・そうですか」

ゴキブリ並みのしぶとさだとか思ってたそう

レクを見ながらそう思ったら。レクがこつちを見て深く頷いた。

・・・そう思っていたらしい。ていうか、人の考え解るの？

レクとテレパシー的なもので会話？していたら、ラリアットの人
が振り向いた。

「お、連れがいたのか・・・ん？・・・おまえ、女じゃないのか？
なぜ男子の制服を着てるんだ」

「そう思つなら、僕を見て気づいてほしかったな」

レクは懔然としながら言った

「ん？どういうことだ」

「僕がどうして女子制服を着ているのかってこと」

「女生徒だからあたりまえだろ」

「・・・僕は男だよ」

睨みつけながら言ったレクの一言に、リアットの人は固まった・
・。

本気で女だと思っていたらしい・・・。

「そうだね、動物学上、レクは生まれてからずっと男だよね」

「・・・そうか、すまなかった。」

「もういいですよ。ミナ、早く交換・・・」

「うん、『空間・物体転移』」

そういうと、さつきと同じ現象が起き私とレクの服が入れ替わった

「うん！かんぺき」

「いいこだよ、ミナ。ありがとう」

「えへへ、」

「じゃあ、入学式に行こうか」

「うん！」

「あ、待て。俺も一緒に行こう」

「あー、おれも行くって」

いつの間にか、クラー先輩は復活していた。

さすが、ゴキブリ並だね

私達は講堂にやっとたどり着いた。見えていたのになかなか着かない。それだけでここがどれだけ広いかあらためて感じた。

講堂に入ると、入学式は始まっていた。

私とレクはあわてて入学生最後の列についた。変態先輩とラリアットの人はすでにどこかに行っていた。

この学校には、校長という役職がない。

講師は授業で自らの知識と研究成果などを教え、演習や実験などでの生徒の補助などを主な仕事とする。

だから生徒を、さらには講師達大人を束ねる人間は生徒の中から選ばれる。

そして、生徒の中から選ばれた優秀な人材。それが生徒会

生徒会は専攻学科別に上級年（3、4、5年）の成績優秀者の中から選ばれる学長と呼ばれる執行員が全員で15人

特別に特化した能力が認められた特認生

年に1回行われる生徒会総選挙で選ばれた会計1人、書記2名、副会長2名、生徒会長1名で組織されている（執行員＜書記〃会計＜副会長＜特認生＜生徒会長）

生徒会入場です

司会者がそういつて右側に手を向けた
司会者が示した方を見た

そこから出てきたのは、さっき会った、変態クラー先輩とラリアットの人、そして続々と人が出てきた。

その人達が出てくると歓声と怒号が渦巻いた。

つまり、出てきた人たちは皆見事に美形で、歓声を上げたのが女子、怒号が男子。うれしすぎて失神してる人がある。ご愁傷様？
そして、最後の人が出てくると、さらに大きな声が上がった。今度は女子はもちろん、男子も歓声を上げていた

誰が出てきたんだろ？ちょっと前の人立たないですよ、見えないうちに見えた・・・ん？なんで、あの人がいるんだろ・・・

最後に出てきた人、それは私達の幼馴染・・・クウだった・・・

学園「入学（前）（後書き）」

クウ再び！

クウは2年の15さいですね

えゝと誤字脱字。気を付けていますがありましたら報告お願いします
感想など待ってます

学園「入学（後）」

生徒会全員が講堂に入り終わると、司会者がしゃべり始めた。

《今期生徒会は、このメンバーに決まりました。

時間の都合上、挨拶は生徒会長、特認生3名にさせていただきます。

》

司会者がそう言うと、生徒会のメンバーの中から4人の人が前に出てきた。

はじめにマイクを持ったのは、マホガニー色の髪とブロンズの目のやさしそうな印象の女の人だった。

《みなさん、こんにちは。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

このたび、生徒会長に任命された、クリスティーヌ・カルマンです。今年の新入生のレベルは相当高いと伺っております。

しかし、それに驕ることなく、日々すごしていただきたい。

簡潔ではありますが、これで私からの挨拶とさせていただきます》

本当に簡潔だった……。30秒も過かっていたと思う。

新入生は、皆、呆気にとられている。先輩達はまたかという顔をしている。いつものことのようにだ

続いてマイクを持ったのは、特認生の中で一番大柄な男の人だっ

た。

《新入生の皆さん、おめでとう。

軍兵専攻の特認生、バーミー・カウンセだ。

学長と特認生は専攻の授業で講師をすることもある、なので軍兵専攻の者達とは、たびたび会うこともある、そのときは遠慮なく声をかけてくれてかまわない。他の専攻の者達も、気軽に声をかけてくれ最後に、ここの生活は基本自由だ、規律を乱さぬ程度に楽しんでくれ》

次は小柄なアッシュグレイの髪の少年だった。

《新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

医術特認生の3年アドルフ・エレオノーツです

ここでは、演習など実践的な訓練をする学科もありますから、怪我などにご注意ください。

ついでに言っておきますと、怪我の理由の一番は演習時など、ついで二番が巻き添えなどの二次被害です。毎日、周囲には気をつけてください》

アドルフ先輩はそれだけ言つと後ろに下がった。

ついでマイクを持ったのは予想道理の人だった。

《新入生の方々、入学おめでとう。

魔術特認生2年のイリイシャ・ランクル・グリフォールドだ私も去年入ったばかりの新人だ、なので皆と一緒に成長できたらと思う

あと、この学園には不思議なことが100種類あるらしい。調べてみるのもまた、楽しいかもしれないな。》

そして最後にクウは私達の方に目を向けた、軽く微笑んでから後ろに戻った。

すると、それまで静かに聴いていた、生徒達が大きな拍手と歓声をあげた。

後日談だが、クウがこう言う事によって、100の不思議を探す人が増えたのは言うまでもない

《ありがとうございました。これにて入学式を終わりたいと思います。

1年生はこのまま寮に戻り、寮内にある掲示板にて、自分の部屋を確認してもらいたいと思います。部屋には学園支給のものが置いてありますので、ご自由に使ってください。

それでは、新入生退場です。拍手！！》

私とレクの部屋はとなりだった。

「ミナ、今日は早く寝るんだよ。朝は僕が起こしに行くから」

ドアノブに手を掛けてレクが言った

「わかった。また明日ね。おやすみ」

「うん、おやすみ」

そう言って私は部屋に入った。

部屋は案外広くベッドの上にはアリイが尻尾振って待っていた。遊んでくれということらしい
でも、私はベッドにダイブした。

「アリイごめんね。今日は眠いから遊んであげられないよ」

「そうですか」

「あっそうそう、明日から授業じゃないんだけどね、学校が始まるらしいからアリイも連れてってあげられるよ」。

「そうですか。たのしみですね」

そう言ったアリイは人型になっていた

「どうしたの？人型になって」

「獣化よりも人型のほうが安定するんですよ。だから、今日からは部屋でのみでも、人型でいたらだめですか？」

「そうだったの？いいよ。ごめんね、気づかなくて」

「いいんですよ。それに、人型でいたほうがいろいろと便利ですからね」

アリイは私の頭をなでながらそう言った。
その動作がすごく気持ちよくて私は眠ってしまった

学園「入学（後）（後書き）」

書いた時がばらばらなので少し変かもしれないです。
すいません

閑話「男爵家のお嬢様（前書き）」

別に見なくてもこれからのストーリーに大きく差し障りはないです
入学式の後の寮へ向かう途中の出来事です

閑話「男爵家のお嬢様」

「ねえ、見た？王子殿下。」

微笑んでいらつしたわね。今まで一度もこういった場では、笑うことなかったのに。

お目当ての子でも入学したのかしら？」

寮への移動中に、そんな会話をしている人がいた。

1人はナイルブルーの髪の女の子で、もう一人はドパース色の髪の少年だった。

「ええ、そうですね。もしかしたら、お嬢様のこともかもしれませんよ」

そう答えたのはドパースの髪の少年

すると、わざとなのか周りに聞こえるように大きな声でしゃべり始めた。

「何を言ってるのビル。いくら私が男爵家の末娘サーシャ・アマンズだとしてもそれだけでイリィーシャ王子の目に留まるわけじゃない」

そうサーシャ嬢が言うとき周りが騒がしくなった。貴族令嬢ということで、周りにいた人たちが道をあけた。

ここに通う人達のほとんどは平民だ。

学年に2、3人しか貴族はいない。理由は簡単、貴族達のほとんどは家庭教師を呼ぶから。わざわざ学校に行って勉強する必要はないからだ。というのは建て前で、世界最高峰ということで箔を付ける

ために貴族の者はこの学校を受験する。だが、甘やかされて育った貴族の子息、令嬢は並より少し上の学力しかない、それで今まで努力をしなくても何でも手に入ったから、すぐに手に入るだろうと過信し、結果的に落ちる。

だからこの学校に貴族は少ない。

平民の入学者が多いのは、商人など自分の出した成果が直接結びつく者、科学者などの子供で研究など勉強が好きな者、あとは家のためにいい仕事に就くためとか何か目標があるものが必死に勉強するからだ。

サーシャ嬢だったかは、周りが退いたので、上位に立った気分になっていたが、私達二人が退かなかつたのを見ると指を突きつけ憤慨して言ってきた。

「ちょっと！あなた達！私は男爵家の娘なんですのよ！平民わたくしごときが私の前にいていいと思ってるの！？」

「別に平民とか関係ないでしょ。ここは学園だ、あるのは先輩後輩と教える者と教えを乞うものの関係だ。その他の身分は関係ないんじゃないかな？」

レクがそう言ってふわりと笑った。

すると周りの女子たちの顔が赤く染まった。

勿論例外なくサーシャもだ。

だが、すぐにはっとなて、またもわめきだした

「…そ、そんなの平民の言うことじゃない！どこに居たって身分は身分、下の者が上の者に逆らうんじゃないわよ！」

うるさいな。いい加減黙ってくれないかな。

あ！そうだ。この子の持論だと・・・

「ねえ、君」

私がそう言いながらレクの後ろから顔を出すと、サーシャ嬢は眼を見開いて驚いた。

レクの後ろ居たから見えなかったのだらうと、見当付けながら、レクの横に並んだ。

おのずと周りの視線も向いてきた。

「なっなによ・・・」

サーシャ嬢の声はしりずぼみしていたが、反抗心があつたので一応試みてみた。

「君の持論で行くとね。君、不敬罪だよ？」

「な、なにがよ！」

「だからね？君の言う身分が上とか下とかの話」

「どういう事よ！私は貴族よ！男爵家よ！不敬罪はあなた達の方よ」

この言葉を聴いて私は不覚にも呆れてしまった。

そして、疑問が一つ。普通の貴族は大体、私達のことを知っている。こちらが知らなくても一方的に。それは、貴族は令嬢をなるべく上の階級に嫁がせるためである。

で、それで考えると、男爵家なら公爵家嫡子のレクに縁談を申し込む・・・はずなんだけど？

あっ！

「わかった！あなた没落家ね！」

私がそう言くとサーシャの顔がみるみる青くなった

「なっなによ。確かに家は没落よ！でも、それでも貴族よ！平民なんかよりえらいわ！」

それにさっきから何なのよ！あなた達！人の事を不敬罪だとか、暴落だとか！そんな事言えるんですもの、それなりの御家の方なんでしょうね！」

サーシャは半ばやけっぱちにそう叫んだ

（ミナ心の声） このまま、私達がこの家の子が言ったら100%の割合で友達が出来なくなってしまう！

それはゆゆしき問題なのだ！だってね、学校に通うからには友達100人っていう夢が私達にはあるの！貴族社会のドロドロした関係じゃなくて、自分って言う存在を見てくれる、そういう友達を私達は求めているの！

ってどうしよう！？どう対処するか決めてなかった！あゝ、ごめん！レク、パス！

「うゝん、一応はそれなりの御家の子なんだけど・・・。
ねえ？」

（レク心の声） ちょっと！いきなり話し振ってこないでよ！もう、仕方ないなゝここはごまかしておいて、後であそこのドパースの子に話をつけるか。

「うん。そうだねそれなりの家の子なのは確かだよ。君も貴族の端くれならば解るかな？これ」

レクは、いつもネックレスにして持っているマクウェント家の紋章入りの指輪を見せた。

貴族の紋章というのは、貴族ならすべての家の紋章を覚えるもので、私もレクも公爵家の一員としてすべて覚えている。

レクの持つている指輪を見て怪訝そうな顔をした。

「なによそれっそれがどうしたって言うの？！」

「・・・珠を貫く剣に、巻きつく蔦に薔薇の花・・・！？」

お嬢様！この方達に頭を下げてください！」

ドパースの子は私達が誰だか検討がついたのだろう、あわてて私達に頭を下げた。

グリフォールド王国には、三大公爵と言われる執政、軍、外交を担当家がある。

執政を担うのは筆頭公爵家のマクウェント家、紋章は国花の薔薇（これは王家の人間と公爵位しか持つことは出来ない）に執政を意味する蔦、そして魔法使いを多く輩出するので魔法を意味する珠、魔法による軍部での活躍で国家の力を意味する剣。

紋章はその家の特化したものなどが使われる。なので通常は1、2個しかモチーフは使われない、それなのに4つものモチーフが使われている時点でそれなりの御家って言うことは解る。・・・はず、なんだけど・・・。

もしかしたらこの子は貴族教育すら受けていないかもしれない。

「ちょっと！どうして私がこの平民に頭を下げなくちゃいけないの？！」

「お嬢様！！何てこというんですか！
すいません。なにぶん十分な教育を受けていませんので・・・」

ドパースの少年はさらに深々と頭を下げた。

自分の主人をああ言うとは、でもそれは正しい判断だね、
ここまで公爵家の人間を悪く言っただ、御家とりつぶしもありえるからね

サーシャは自分の従者が自分を悪く言っただので呆氣にとられている

「別にいいよ、頭をあげてくれ。」

僕達は人のことを平民と言って嘲るのが気に食わなかったただけだ。
今後、僕達の前でそんなこと言ったら君の想像が現実になるよ。
精々気をつけてよね」

レクは笑顔で言った

ドパースの少年には、さぞおそろしかったのだろう、顔面蒼白だった。

私とレクは気が済んだので、寮への道を急いだ。

「・・・ミナ・・・また、きれいになったね・・・」

「？殿下どうしたのですか？」

「ん？・・・大切な子がここに入学してきたんだ・・・もう何年も会ってない子なんだ・・・」

「大切な子。ですか？」

「へえー王子の大切な子？よかったですね
あつそうそう、ぼく、すごく可愛い子達見つけたんですよ！
まさに天使ですよ」

「ああ、そうだな相当可愛かった、お前も久々に理性とんでいたかな」

「え、何々どんな子？あたしも会いたいわ！」

「黙れオカマ！」

「だ、れ、が！オカマじゃー！！！」

「うわ~~~~!!」

「相変わらず騒がしいな」

「そうですね。怪我をしたら、薬の実験題にしましょうかね」

「……………だめ……………」

「……………どうしてここには華がないのだろうな」

「同感です殿下」

生徒会。

そこはこの学校の最高権力組織

ミナ達はまだ知らない、生徒会は変態の巣窟だと……

閑話「男爵家のお嬢様（後書き）」

どうだったでしょうか？

あまり必要ない話ですかね？

最後のセリフだけのやつは仕様です。生徒会メンバーは一応すべて出しました。声だけですが・・・。

学園「担任」

魔法科の塔は、この学園の中で一番大きな建物の生徒会寮と巨大演習場と一般生徒立ち入り禁止の森の間にある。

私達は今、魔法科塔の3階の1年の教室にいる。

魔法科は他の学科よりも難易度が高く生徒数も少ない、なのでクラスも一学年一クラスしかない。そして、今年の入学者は10名だった。

「ねーレク、この中で一番強いのは誰だと思う？」

「そうだねー、うーん、僕達より強い子はもちろんいないけど……」

レクはクラス全体を見渡した。

レクの眼には今、魔力が流れている。

魔力は使い方によっていろいろな効力が得られる。眼に流す所で言う暗闇でも昼間のように見れるとか相手の弱点がわかるとか……まあ、その他いろいろ……で、いまレクが使っているのが、魔力の流れと量、属性が見れる、というやつ。

「……しいて言うなら、あの子かな？」

「へー、あの子？ちょっと意外かな？」

レクが示したのは、メガネをかけたおとなしそうな少年だった。本を読んでいた少年は、私達の視線に気がついたのか私達の方を向いた。

私はいつもどおりにつこりと笑った。すると、少年は真っ赤になつて顔をそむけた。

「なんだろう、嫌われたのかな……」

「……いや、多分違うと思う……気にしないでいいよ」

レクはなぜか苦笑いしながら言った。すると、前の方で女生徒がキヤーと黄色い声を上げた。

見てみると、このクラスの女生徒全4名の内3名（残りは1名はミナ）が一人の生徒を囲んでいた。

「このクラスの女の子たちは可愛い、この学科を選んで正解だった」

前の方にいた亜麻色の髪の少年は、後ろの方にいた私達にも聞こえる声の大きさを話している。

なぜ、どいつもこいつもこんな大声でしゃべるんだろう……。傍迷惑だな。

周りにいた少年達は、苦々しい顔や羨ましそうな顔をして見ていた。

「うるさいな。耳が腐りそう」

レクが呟いた。

その声が聞こえたのか、亜麻色の髪の少年がこちらを向いた。

少年の容姿は、一般的に美形と呼ばれる部類だった。

「なんだい？君達、ボクの美しさに嫉妬しているのかい？」

少年は容姿は美しいが頭はおかしいようだ。いや、ここには入れたのだから馬鹿ではないはずだ。思考回路がおかしいのか？

「・・・嫉妬なんかしてないよ。大きな声を出して、恥ずかしくないのでかと思っただけだから・・・」

レクは静かに、けれどよく通る声で言った。

そして、立ち上がりゆっくりと少年の方に近づいていった。私もその後続く

「なっ！なにを・・・」

少年の顔が驚愕に、周りの生徒達が呆氣にとられたような顔になっていった。

「少人数しかない場所で大きな声を出すのは、滑稽にしか見えないうって言ってるんだよ？」

レクは微笑んだ。

私はレクの隣に並んだ

「うん、そうだね。この人数だったら、普通の声量でどこまで遠くにはつきり聞こえるかって言うのが大切なんだよ？」

「・・・そ、そんなこと、とうぜんじゃないか。しっ、しってるよそんな事」

少年・・・キザオでいいや。キザオは最後に何とか持ち直したよ
うで、前髪をはらった。

「そうなの？ごめんね、知らないと思って教えてあげただけど・
」

「そうだね、僕達は要らぬ恥を掻かせてしまったみたいだね」

私達は心底申し訳なさそうにした。

「ま、まあ。別にいいよ、ボクは心が広いからね」

「そう、ごめんね？ありがとう・・・」

そう言って、私達は元の席に戻った

「ふう、これで少しは静かになるかな？」

「そうだね、これ以上恥は掻きたくないだろうしね」

「・・・きゅ・・・」

アリイが鞆から顔を出して鳴いた

「あっごめん、アリイ。今出してあげるから」

「アリイ居たんだ知らなかったよ。」

でもミナ、アリイは出さない方がいいと思うよ？」

「どうして」

「他の生徒はだしてないでしょ、むやみに出さない方がいい」

「そっか。分かったよ

ごめんねアリイ、もう少しだけ入っていてね」

そう言ってアリイを鞆に戻した。

その時、まへの扉が開いて、三人の大人が入ってきた。

一人は女性で長い髪を無造作に一つにまとめていた。もう一人は男性で40代くらいの恰幅のいい人で最後の一人も男性でダンディなおじさまって感じの人だった。

「それでは、全員席に座ってくれ。まずはこのクラスの講師を担当する事になったアタシ達三人の紹介をさせてもらう。

アタシは理論担当のフィオラ・ライラック。協会のランクは中級魔術師。属性は土。以上質問は？」

周りを見渡す。何人か手を上げた。が・・・

「ないようだな。では次。」

フィオ先生は華麗に無視。

「リニイ・バンコントだ。実技を担当する。ランクは中級魔術師。属性は水。質問はあるか」

今回も何人か手を上げた。

「歳は幾つですか？」

「・・・24だ・・・」

リニイ先生の言葉にクラスが驚愕の声を上げた。

「うわゝすごいねゝ。こんなにダンディダンディした人が24歳で
おじさま趣味の人にはたまらない人だねゝ。」

「・・・次、おねがいします」

「大丈夫ですか？リニイ先生。・・・ああもういろいろ限界そうですね・・・。」

えゝと。このクラスの補佐担当になりました、モント・ルーハスです。モテイ先生と呼んでください。

協会ランクは中級魔術師で属性は風です。一番皆と過ごす時間が多いのでよろしくお願いします。質問はありますか？」

「歳はいくつですか」

「はい。40さいです。この中の最高齢ですね。ちなみにこの学園で最高齢なのは魔法科の講師のバルト・ライラックさんでフィオ先生のおじいさまでいらしゃいます」

「余計なことは言わんでいいモテイ先生！」

「次はお前達だ。前から順番に自己紹介していけ」

そう言われて最初に挨拶したのは、キザ才君、名前はエルミオ・ハミリア。噛みそうになる名前だった。

私達は一番後ろの席に座っていたので一番最後だった。

「次」

そう言われて、私達は立ち上がった。

「はい」

「レクライ・マクウエント14歳。キリエート出身です。」

「ミナレイ・マクウエント14歳です。キリエート出身でレクとは双子です。ここでは友達をたくさん作りたいと思っています。」

「よろしくおねがいしますね？」

そう言っただけで私達はにっこりと微笑んだ。

生徒はもちろん先生達まで赤くなった。うーんなんだろう？

「・・・こ、これで全員自己紹介は終わったな？。明日は魔力、能力測定がある。魔力と属性。身体能力などを測る遅刻するなよ。今日はここまで、昼は大講堂の二階にある食堂で食ってくれ。以上解散。」

私達は早々に教室を出た。伺う様な視線が居心地悪かったからだ。

「明日楽しみだね？レク」

「そうだね、あのクラスのレベルが如何ほどなのか。魔力測定とか能力測定とかって全学科全クラスだったよね。クウにあえるね」

「そっだね。まさか、学園に入ってるなんて思わなかったからね。びっくりしたよ」

「ふふっ楽しみだね。明日が・・・」

「明日は魔力測定がある。ミナとレクはどれだけ強くなったのかな？
・・・ミナ・・・君に早く会いたいよ。
・・・最後にあっただのはいつだったっけ・・・」

コンコンッ

ガチャ

「ハローおうじさま。ヴェルナー様がいらつしたわよー。」

ドアをすごい勢いで開けて入ってきたオカマもといヴェルナー・アビスラルクはそのままの勢いのままこの国の王子さまイリイ・シヤ・ランクル・グリフォールドに抱きついた。

「はなせっアビスラルク！人の部屋に勝手に入ってくるな！！」

後からリース・ダリアがやってきた。

「こらオカマ！！なにイリイ・シヤ様の部屋に勝手に入ってた！！」

「あらなによっあなただっかってにはいつてるでしょ！！」

「・・・ふう。もういい勝手にしろ・・・！」

「やったー！お許しが出たわ。皆連れてこなくちゃ！」

「オカマ！調子に乗るんじゃねー！！」

この日、2年寮の最上階角部屋には夜遅くまで明かりがついていた。

学園「担任（後書き）」

どの小説にも出てくる？キザオ君が登場しました。

だんだんミナレクが黒くなってくる・・・。

毎回忘れる存在、アリイ。いつも忘れてしまいます。それで書いてあつ、忘れてた・・・！！ってなります。ごめんよアリイ・・・。
一応レニイ先生はエリートです24だったら良くて下級魔術師です。

ダンディなのは、なぜかコートとタバコと髭が頭に浮かんだからです。ダンディさんの必須3ポイントです！！

誤字脱字ありましたらご報告よろしく願いしますm（　　）m

学園「測定

「勝者、レクライ・マクエント!!」

「「「「「おゝお!!」「」「」

室内に歓声が響き渡った。

「うわぁ」

「すごい…」

「すげえ!!」

私達は体力測定を受けた。

体力測定は握力、幅跳び、持久走などだった。
結果は・・・

ミナ・・・総合 学年2位

レク・・・総合 学年1位

だった。

まあ、この結果は当たり前といえば当たり前といえる。

魔法というのは本来魔力のほかにも精神力や体力も使う。

普通の魔法使いは魔法の程度が低いのであまりたくさん体力は使わない。だが、ミナとレクの魔法は程度が高くてたくさんの体力を使う。つまり、魔法の密度の違いだ。

また、ミナとレクは、普通の魔法使いよりも魔力の量があり自然に抑え気味に使わないといけないというのもある。魔力を抑え気味に使うというのは、抑えた自分分の体力を削ってしまうものなのだ

その他にもアリのの特訓の成果だとか、ミナとレクが元々運動神経が馬鹿みたいに良かったとかいろいろと要因はある。

そしてさつき、極ありきたりな感動の言葉を言ったのは、昨日、レクが見た中で強いと思った3人だ。

一人はメガネをかけたおとなしそうな男の子、もう一人がショートの髪が良く似合う男前って感じの女の子、そして最後にキザオ君。この三人の学年総合結果はショートの子が17位、メガネの子が39位、最後にキザオ君が136位。ちなみに今年の一年生は362人だった。

この時もキザオ君は「こんな所で本気を出すなんて、恥ずかしいまねしないさ」とか言っていたのでレクが「こういう所である程度やっておかないと過小評価されてしまうよ」なんて忠告？していた。キザオ君は体力測定るとき結構本気でやってきていたので負け惜しみを言っていただけなんだけど言い方がいちいち鬱陶しい。

そして、私達は今魔法測定をする場所にいた。

魔法測定は大演習場で行われる。

魔法測定は魔法科も他の科も行われる。だけど、測定の後に魔法科だけ試合が行われる。

これは、勝者に挑戦者が挑み、次に勝った者が次の挑戦者と戦う。そうして最後まで残った人が学園一位とうわけだ。

今、Aブロックで戦っている人たちは均衡していた。だがわずかに左の人のほうが技術があり勝った。そして、次に挑戦した者はクウ兄だった。

隣から話が聞こえてきた。曰く、クウ兄は今年の？1だそうだ。

勝負は一瞬だった。ドゴンツと大きな音が聞こえたかと思うとあたり一面砂煙に覆われた。晴れたと思つてフィールド内を見ると悠然とたたずむクウ兄と決られた土の中央にさっきの勝者今の敗者が倒れていた。これを見て怯えた人たちはクウ兄よりも下位も人の所に挑戦しにいった。

そして残ったのがミナとレク、キザオ君はもちろん、ショートの子もメガネの子も下の位の人の所に挑戦しに行った。

クウ兄は私達を見るとびっくりした様になっただけ、次の瞬間には嬉しそうに微笑んで言った。

「ひさしぶり。ミナ、レク」

大衆の視線が私達に集まった。

入学式の日に笑っただけで大騒ぎになったのに、今度は名指して、しかも、久しぶりと笑顔で言ったのだ。自然と大衆はこの人物は何者なのだろうと思うだろう。

ここにはほぼ全校生徒と講師が揃っているからそれはもう大勢の視線にさらされた。

「おひさしぶりです。クウ兄」

「久しぶりです。クウ兄様」

私達はそれぞれ挨拶を返した。敬意と親しみを込めて。

周囲は私達の愛称＋兄発言にざわめいた。

王太子直々に御挨拶頂いただけでも凄いのに、普通に挨拶を返し、あまつさえ王太子を兄とよんだのだから。

「君達がこの学園に入ってきたのは知ってた、きてくれて嬉しいよ。これでまた一緒にいられるんだから」

「僕達はクウ兄がこの学園に入ってたなんて知らなかったよ。僕達が屋敷でただただ君からの手紙を待っている間、君は学園で楽しく過ごしていたなんてね」

「そうだね。」

私達が屋敷で、ひたすらつまらない家庭教師の授業を受けている間、クウ兄はお友達と楽しく授業って、酷いよね。私は誰かさんのせいでなぜか、お披露目会でしか公の場に出れなくて友達作れないって言うのに・・・」

「お、おい。ミナ、泣かないで？レク、お前ミナに伝えてないのか？ミオ叔母様達も？」

「当たり前でしょう？そういうことは自分で言う事です」

「もう、何ごちゃごちゃ言ってるの？」

私は怒ってるんだからね？

っていうわけで、私達の怒り受けなさい？」

ミナとレクは自分達は双子だとか意味不明なことを言って、

ミナ&レクVSクウというカードが組まれた。

まあ、二人のキラキラ光線とクウのかまわないの一言で実現したことが。

ミナはすでに基本の全属性が使えたのだが1年生でそれはまずいということが一番とくいな雷（発生）を使うことにした。レクは水と風が使えたのだがこれも得意の水を使うことにした。

先手を打ったのはクウだった。

クウは先程使った技で地面を陥没させた。ミナとレクはこれを後ろに跳んで避け、レクが水の蛇を作り出し空に向けて放った、次にミナが雷を地面に伝わらせてクウの足元に雷柱を立てた。それを避け

ようとクウは雷柱の反対側に跳んだが、そこにはクウ自らが開けたクレーター、そしてその中には水溜り程度の量の水（レクが初めに放った水の蛇の水）クウが水にはまると同時にミナは雷を落とした。

あたりは静まり返った。そして大きな歓声が湧き上がった。

クウは意識があつた、雷といっても微量の電気を流しただけなので体の自由を少しの間奪うくらいしか出来ないからだ。

少ししてクウが動けるようになると、ミナとレクはクウを助け起こした。

すると遠くから一団が歩いてきた。

だんだんと近づいてくるとその一団が生徒会であることがわかった。

学園「測定（後書き）」

長い間書けずにいてすいません。

やっと書けた・・・。これ一回失敗して全部消えちゃって虚しい気持ちになりながらいろいろ割愛して書きました。まじで泣きそうです。

中途半端に閑話「猫なクウ（前書き）」

わけのわからないところで閑話です。

すいません……。次は本編書きます……。多分……。

中途半端に閑話「猫なクウ

「・・・うう、もう朝か・・・」

トントント

「はいれ・・・」

「失礼します」

扉を開けて入ってきたのは、医術科のアドルフ・エレオノーツだった。

アドルフは医術科といっても薬学専攻で、今までさまざま薬を作っては、生徒に試しに使っている、と言ってもこの事を知っているのは生徒会と一部生徒だけなので大事にはなっていない。

「王子、また徹夜したのですか？」

「ああ。集中してたらいつの間にか朝だった・・・」

ランクルは眠たい目をこすり机から起き上がった。

「そうだと思って、栄養剤持ってきました。飲んでください。」

アドルフはポケットから小瓶を取り出し机に置いた

「ありがとうございます。」

ランクルは眠たくてぼーとする頭で、言われるがまま小瓶の中の液体を飲んだ

「・・・まずっ！」

「良薬口に苦しですよ。すぐ効いてくると思いますから・・・」

アドルフは途中で言葉をとめた。

「どうした？アド・・・」

あれ、声が出ない・・・。

そう思っ て何気なく喉に触れる。

ん？何か違和感が・・・

ってなんだこれー！！！！？？

「一にや、にやんにやんにやにやな！《な、なんなんだこれは
アドルフー！
！》にやなにやなー！」

そう言いながらランクルはアドルフに跳びついた。

「あゝ。間違えました。

それは栄養剤じゃなくて変身シリーズの猫ですね。
匂いが似ているので間違っただんですね。」

アドルフはランクルを抱っこしながらいった

「—にゃ！にゃんにゃにゃ！《な！なんだと！》」

「でも、安心してください。1日したらもどると思いますから」

アドルフはランクルを放すと部屋から出て行った。

「それでは、失礼しました・・・。」

「まじえー！！！！
にゃー！！！！」

くそ！アドルフの野郎元に戻ったらおぼえてろ！！！！
あゝ、イライラする。

・・・暇だ。外に出よう

クウは外に出るために扉を開けようとした・・・
が、開けられなかった

別に、高くてノブに届かないと言っわけじゃない。
ジャンプすればノブには届く・・・
が、扉が重くて開けられないのだ。

- - バタバタバタっ

その時、足音がクウの耳に届いた

この音は・・・

- - バンっ

扉を勢い良く開け放ったのはオカマのヴェルナーだった。

「王子様～～！ヴェルナーちゃんがあそびにきたわよ～～・・・って
いないの～～？」

- - ばたばた

- - ばん

「オイ！こら、カマてめえ！！
イリーシャ様の私室に勝手に入ってんじゃねー！！」

続いて部屋に飛び込んできたのはリースだった

「あら、リース。

今、王子様外出中みたいよ？」

「それは良かった。

カマのためにイリーシャ様の貴重な時間を使わせなくてすむ。
ほら、さっさとこの部屋から出る！！」

「ふう。仕方ないわね・・・」

そういつて二人はでって行った。

運良く、扉は開けっ放しだ。

あのカマもたまには役に立つな

クウは非常に失礼なことを思いながら部屋を出た。

- - スタスタスタ

生徒会塔の廊下を歩いていると前方から足音が聞こえた。

足音の主はクラウドだった。

「ん？・・・ねこだ・・・」

クウに気づいたクラウドは周りを確認し誰もいないと見るとクウを捕まえた。

「うわぁもふもふだ・・・。かわいい・・・」

クラウドはそう言っているとクウを抱っこして歩き出した。

「君は今日から僕が飼ってあげるから」

な、なに。やめろ、俺はお前に飼われるつもりはない！はなせく
く！！

クウは必死に暴れた

「こら、暴れるなって」

放せ放せえくく！！

「クラウド。なにやってるんだ？

ん？猫か。お前また連れて帰ろうとしてたんだな。だめだといって
いるだろ。

ほら、その猫をよこせ。」

バーミーはそう言ってクラウドの魔の手からクウを救い出した。

今ほどお前がすばらしく見えたことはないぞバーミー！！

クウは体が戻ったらバーミーに菓子折りを持っていこうと思った。

クラウドの魔の手から逃れたクウはバーミーの手によって生徒会寮の外に出された。

（うーん。これからどうしようか。
あ、そうだミナに会いに行こう。）

思い立ったら即実行とばかりにクウは一年寮に向かって歩き出した。

中途半端に閑話「猫なクウ（後書き）

変な所でした。力尽きたんです・・・。
申し訳ありません！！

中途半端に閑話「猫なクウ

一年寮に着いた。

一年寮は生徒会寮から徒歩5分ほどの距離にある。猫になった今日の俺では10分もかかってしまった。

一年寮は他学年の寮と同様に連立して建っている。学塔地区に近い順に5年生。4年生・・1年となっている。

一年寮には俺は半年しか居なかった。一年のうちに特認生になったからだ。

まずは進入経路を探そう。

寮の周りを周ってみると一つの窓が開いているのが分かった。

あそこから入ろう。

窓は一階ではなかったが猫の脚力で何とかあった。

さて、ミナとレクの部屋は最上階だったか

クウは意気揚々と階段を上り始めた。

この学園は完全実力制だ。

実力さえあればどのような身分であろうといい待遇が受けられるし、逆に実力が無ければどのような高い地位、たとえば王族であろうとも待遇はあまり良い物にはならない

そしてなにより、生徒の自主性やら何やらを鍛えるところでその待遇の差は分かりやすいようになっている。

たとえば食事。特上、上、中、下という具合に豪華さやレパートリーの量が違うのだ、もちろん食堂は同じなので下の料理しか食べられない者はあの料理が食べたいと思ってがんばって勉学に励む。

他にも手紙のやり取りや学内下の魔法や剣の使用権限、もちろん住居なども違ってくる

住居と言っても寮なのだけれど、それもランク別になっている。

部屋の大きさ、備品などの日用品、収容人数などだ

特上といわれるのは学年に2人で勉強、運動その合計点が高いもの
がなる。部屋はもちろん一人部屋で備品も最高級品、部屋の間所も
寮の最上階を特上の二人が使うだけ、専用大風呂やほしければ専属
侍女をつけることも可能なのだ。

まさに至れり尽くせりって感じだな。

今の説明で大方分かっていると思うが、今年の一年の特上ランク
生徒は俺の幼馴染であるミナとレクの二人だ。

つまり、ミナは最上階にいるってことだ。

- - カチャ

クウは以前自分が使っていた方の部屋の扉を開けた
すると中から話し声が聞こえてきた。

ん？話し声がするな、レクとミナは二人でいるのか？

「... ですから、主。それは私がやると……」

「大丈夫だって…、あっ！」

- - ガラガラ、ドスンッ

「！？ あ、主！ 大丈夫ですか！？
今、治療します動かないでください」

「だいじょうぶだよ」

それよりどうしよう、せっかく片付けたのにちらかちゃった」

「そうですね、そろそろお昼ですし昼食にしましょうか?」

「うん、そうする」

扉を開けてすぐところにいたクウはぱちりとミナと眼があった

「にゃ、にゃゝお?」

クウはとつさに鳴いた

まずい、まずいぞ。部屋に勝手に入っただのがばれたら…。

って今、猫じゃんその辺は大丈夫だな。

残る問題は1つミナの隣にいる男は誰だ!?

「わあゝ。ニャンコだよアリイ、ニャンコ!」

「そうですねえ。何処から入ったんでしょう?

まあ後で外に出しておいてあげましょう」

「うん、わかった。

レクの所連れて行ってもいいかな?」

「レク様が嫌いじゃなければいいですけど…」

「じゃ、大丈夫

レクは基本動物が好きだから」

「それでは行きましょうか」

クウはミナに抱えられたままレクの部屋に行くことになった

「うん。寮内にいるって事は誰かの使い魔かもしれないね。
だったら早く帰してあげないと」

レクに猫について説明すると早々にそう言い出した

「うん、じゃすぐに放して来る」

「一人で行ける？」

レクが心配そうに聞いてくる

「大丈夫だよ、外に放したらすぐ帰ってくるから」

「いつてらしゃい」

「いつてらっしゃいませ」

「いつてきます」

「うふふ、ふわふわあ

ねえニャンコさん。ニャンコさんの毛の色と眼の色はね。私の幼馴染と同じ色なんだよ。

その幼馴染はね、1つ年上だからかな？いつも一人で何でも背負い込んでるの。

私達はいつもクウの見方なのになんだか信用されてないみたいにしてね。すこし悲しいなって思うんだ……」

寮の玄関まで来るとミナは猫を放した

「バイバイ、ちゃんと帰るんだよ？」

ミナが見送る中、クウは急いで寮に戻った

「あ、いたいた王子。そろそろ薬が切れる頃です。部屋に戻ってください」

「にゃ」

クウはその言葉を聞くと自室に勢いよく走り出した

部屋に入るとほぼ同時に体が元に戻りだした

「やっと、戻れた」

・・・トントン

「王子、ぎりぎり間に合ってよかったですね」

「なにが良かったですね？だ。元はお前が悪いんだろうが」

「ひどい。ほんとに間違っただけなのに、栄養剤は善意なのに……」

「あゝもう分かったから
とっとと出て行け」

「はいはい」

アドルフが出て行きしばらくするとクウは椅子に腰掛けた

一人で背負い込む、か……。信用しているよ、ミナもレクも。だけど、君達にはまだ重い者を背負ってほしくはない。

それにしても、ミナの部屋にいたあの男。いつたいたれなんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514j/>

竜と双子の物語

2010年12月5日12時01分発行